

右の手をうつむけてはしをとり、左の手をおおのけて取、右にて取直し候事、いんやうたるべく候、扱はし取たる手にて前鹽をちとくいそめ、わんを取あげ、湯漬をくふて、こんどははしききにて前鹽をくふ、又わんをとり、湯漬をくふて手ごしのさいをくふ、又湯漬をくふて、さいごしのさいをくふて、はしをとりなをし、二ツめの手本の汁をくふ、又湯漬をくふて、うんのさいをくひ、はし取なをし、三ツめの手本の汁のみをくふ、又ゆづけをくふて、めいのさいをくふ、又はしを取なをし、二ツめの右の方の汁をくふ、其後いかだをあつかい候て、いかだをばくはずして、ゆづけをくふて、さていかだをすしほにつけてくふて、はしを取直し、三ツ目のひだりの方の汁をくふ、いかだのあつかいやうにあり、又湯漬をくふて二ツめの中に有にくのふたを、はしとりなをし取て、にくのからの上に置にくの上をくふて、四ツめのしるを給候、

一湯漬の時は、ゆづけをくひ、さいをくふて汁にうつる、○中をうじて汁にしるをそへ、さいにさいをそへざる事、定りたる法なり、○中

一御湯漬の時、御酒あがり、御酒のあいだにうづらの扱あり、かつて御ゆづけの内にたべ候事あるまじく候、

〔禮容筆粹^七〕湯漬之事

ゆづけ品々ありて、故實むづかしきよしに候、先大様は食を湯にてあらひ、椀にもり出す也、扱箸を取、中を少くつろげ、湯を七八分にうけ、下ニ置、喰べし菜は香物よりくひ初る也、汁はすはずして、躬計をくふべし、再進をかへず、跡に湯を吞候時、はしをそへず、かうの物をくわす、すいぶんはしによこれざるやうにすべし、

兵庫湯漬之事

始のごとく湯をうけて喰べし、たとへば精進にても、膾などを喰ては、水にて箸をす、ぐなり、汁